

2024 年度台東区芸術文化支援制度

三浦環（1884～1946）生誕 140 年記念

「三浦環のシューベルト《冬の旅》」

—新発見の訳詞・録音史料に基づく再現演奏と語りでおくる

プリマ・ドンナの人生と芸術—

報告記

早坂牧子

本公演は、オペラ歌手三浦環の生誕 140 年を記念し、最晩年の《冬の旅》の演奏について、今回新たに発見された訳詞と未公開の録音の聴取をもとに再現演奏する目的で企画した。2024 年 11 月 29 日（金）18:30 より旧東京音楽学校奏楽堂において開演、休憩なし約 100 分の公演で 20:10 に終演した。来場者数は、前売 199（一般 190、学生 9）、当日 11（一般 10、学生 1）、招待 37 で、計 247 名であった。演奏に小林沙羅（ソプラノ）、河野紘子（ピアノ）、朗読に吉田孝を迎え、脚本は大石みちこ（東京藝術大学大学院映像研究科教授）により、制作に岩神六平事務所の協力を得た。

本公演のきっかけとなったのは、脚本を担当して頂いた大石みちこ氏との出会いである。2020 年、当時環の評伝¹を執筆中であった大石氏と知り合い、《冬の旅》の音源がどこに残っていないだろうか、という話になった。1946 年 4 月 5 日、環が死の約一か月半前に某放送局の依頼で《冬の旅》全曲、《蝶々夫人》（抜粋）、歌曲数曲などを録音した事実は知られており、《蝶々夫人》や歌曲の方はその後 CD に収録されたが²、《冬の旅》の音源が残っているかどうかは分からなかった。放送局のアーカイブスに《冬の旅》の音源について照会したところ、データが現存しているとのことで、大石氏と共に一か月の調査を行った。幸い、音源は演奏のスタイルや歌詞の聴取に耐えうる状態で残されていた。評価の高かった透明感のある高音はそのままに、どこか鬼気迫るものを感じさせる絶唱に、ブースの中で胸が震えた。一部聞きとれない歌詞があったが、1944 年の演奏会パンフレット（玉川大学教育博物館ガスパール・カサド 原智恵子コレクション蔵）に訳詞が掲載されていることが分かり、全曲を復元することができた。環の《冬の旅》を、彼女がオペラ・デビューを果たした旧奏楽堂の舞台に里帰りさせたい—そう思ったことが今回の企画に繋がった。

¹ 大石みちこ、『奇跡のプリマ・ドンナ：オペラ歌手三浦環の「声」を求めて』（KADOKAWA、2022 年）。

² CD『伝説のプリマ 三浦環』（おんがくのまち、2000 年）。

「再現演奏」と銘打ったが、聴取したスタイルを単にそのまま演奏するだけでは、生誕140年の催しとして何だか芸がない。そこで、《冬の旅》を環の人生の旅と重ね、大石氏の脚本による語りを入れることにした。《冬の旅》全24曲の所々で、環の二番目の夫・政太郎が自らの視点から環の人生を語る。《冬の旅》の歌詞と、政太郎の言葉とが交差し、音楽に生きた環と、葛藤を抱えつつもそれを支えた政太郎との対話を聞いているかのような舞台になった。創作を含んだ舞台構成は挑戦でもあったが、これも史料を活用した人物顕彰のひとつの形である。録音の調査から足かけ三年間に及んだ準備を共にし、環と政太郎の《冬の旅》の世界を見事に描いて下さった大石氏に感謝したい。

環の歌唱の実際や訳詞の特徴については、企画者による「覚書」³を参照されたいが、今回「環の《冬の旅》」の公演において最も重要な要素となったのが、第23曲〈幻ろしの太陽〉（‘Die Nebensonnen’）における歌詞の変更である。1944年に環が《冬の旅》を歌った際、原語に沿って「われに相応しき常闇よ」（‘Im Dunkel wird mir wohler sein.’）と訳されていた部分が、晩年の録音では「われに相応しき光」と歌われていた。この音源は結局現在まで公表されたことがなく、ラジオ放送を目的としたものか、記録のためのものだったのか、録音の意図も分かっていないが、「常闇」を「光」に変えたのは、確実に聴き手を意識してのことであろう。終戦直後の荒廃を生きる人々、あるいは病を得た自らに向けた励まし、希望、祈りを込めた言葉だったのか。いずれにせよ、人生の終焉を予期した環からのラスト・メッセージであるように思われてならないのである。歌詞の変更という行為は、見方によっては原曲への冒涇とも受け取られかねないが、その是非はさておき、環が最後に録音を通じて残した「闇から光へ」というテーマが、この公演におけるドラマのクライマックスを築くポイントになった。今回の公演を通じて、《蝶々夫人》だけでない環のレパートリーとその音楽性、そして、そこに環が投影していたであろう彼女の最晩年の境地を広く一般に紹介できたことが、いくばくかでも三浦環の顕彰と洋楽史研究への貢献となっていれば嬉しい。

放送局のアーカイブスにある環の《冬の旅》の録音は非公開のため、独唱の小林氏には、調査時の記録に基づき細かに環の歌い方を伝えた。カデンツのフェルマータや大仰なルバート、ポルタメント、音高の変更など、現代耳にする《冬の旅》の演奏とはかなり異なる歌唱スタイルであり、文語調の歌詞には戸惑いもあったと思うが、小林氏は環の人格や表現方法を読み込んだ上で巧みに表現して下さった。また、リハーサルでは、小林氏やピアノの河野氏、語りの吉田氏との議論を通して、語りの挿入位置や表現などを調整していった。言葉と音楽の交錯する第一線で活躍するプロフェッショナルたちとの舞台作りは、普段一人で作業をすることが多い企画者にとっても、大変貴重な経験であった。

³ 早坂牧子、「三浦環の《冬の旅》（1）：訳詞と1946年録音に見る演奏の覚書」、『東京音楽大学紀要』46巻（2023年2月）、43–59頁；（2）同47巻（2024年2月）、43–58頁；（3）同48巻（2025年2月刊行予定）。

結果として出来上がった舞台は、録音の正確無比な完全再現というより、演者が環の歌唱表現を血肉化する作業を通して新たに生まれた《冬の旅》である。現代の我々から環におくるオマージュとして、相応しい公演になったと思っている。

公演日は奇しくも、プッチーニの没後 100 年の命日であったこともあって、アンコールには《蝶々夫人》を取り上げた。環が 1946 年 4 月 9 日に録音し、11 日にラジオ放送された《蝶々夫人》の録音で朗読している「あらすじ」の一部を、今回の舞台では第 2 幕ハミング・コーラスのピアノ伴奏に合わせて吉田氏に朗読して頂き、続けて「ある晴れた日に」を、これも三浦環訳（二つのバージョンを組み合わせたもの）で小林氏に歌ってもらった。「ある晴れた日に」の録音はいくつか残っているので、小林氏はこれらを聞き込み、環の発声や声質を意識して演奏に臨んで下さった。アンケートに「蓄音機で聞いていた環の歌声そのもので驚いた」というコメントがあったが、まさに環と手を携えたかのようなアンコールの演奏であった。

会場とした旧東京音楽大学奏楽堂は、日本初の本格的なオペラ公演《オルフォイス》で環がデビューした舞台であり、ここで環最晩年の《冬の旅》を復活上演し生誕 140 年を記念することが当初からの目論みであった。従って、ここ以外に会場の選択は考えられなかったのだが、旧奏楽堂の舞台使用や付帯設備には制限が多く、今回のように演劇的要素を含む公演の上演には困難も感じた。特に、電気容量の小ささで照明の演出を断念せざるを得なかったことは悔やまれる。また、当日配布したプログラムには環による訳詞を掲載したが、客席が暗く字が読みにくかったという声が聞かれた。訳詞には、現代では意味の取り辛い語句や、瞬時には意味を判別しにくい言葉もあるので、舞台上に字幕の投影があれば親切であったと思う。再演の機会があれば、こうした工夫も検討したい。

観覧者を対象としたアンケートでは、「歴史的瞬間に立ち会っているようで、胸に響いた」「環さんの魂が乗り移ったかのような歌唱だった」「日本語での歌唱は新鮮だった」「戦後の東京の情景が目に浮かぶようだった」「日本と西洋という永遠のテーマを現在振り返る機会になった」「語りを交え、集中して環の《冬の旅》の物語を楽しむことができた」など、多くの好意的なコメントを頂戴した。一方、歌詞の聞こえ方、演者の年齢が環や政太郎より大分若いこと、環の訳詞の質などに対して、批判的なコメントも見られた。様々なご意見を参考に、また新たな形で「環の《冬の旅》」を上演できる機会が将来作れればと思っている。今回は環と政太郎の物語であったが、母の登波や、同時代の音楽家達の視点による、異なるヴァージョンの《冬の旅》の舞台も可能であろう。近年顕彰の動きが見られる、山梨や静岡の縁の地などで、いつか再演できることを願っている。

収支の点では、設定した入場上限（265 席）に迫る来場者数であったにもかかわらず、記録費と広報宣伝費にかなりの追加分が出たために、計画時より大幅な赤字となった。本

公演が「三浦環」をテーマにした学術的性格を持つ演奏会で、どの程度一般の動員を見込めるか予想がつかなかったので、前売 2,500 円、学生 1,000 円と手頃な入場料設定にし、ある程度の自己負担が出ることは覚悟していた。しかし、実施したアンケートではチケット料金に関して「安い」という回答も一定数見られたので、入場料をもう少し高く設定しておいてもよかったかもしれない。また今回、特に音楽を学ぶ学生の来場を期待していたが、学生券の販売数が 10 枚と少なく、学生向けの広報にもう少し力を入れられればよかったという思いもある。本稿の末尾に、観覧者アンケート集計結果の一部を掲載した。同様の学術的正確をもつイベントを開催する際に、参考となれば幸いである。

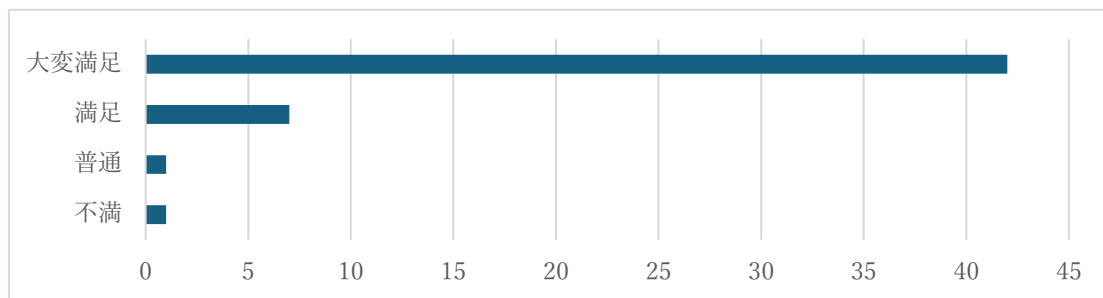
公演の実施にあたり、台東区「台東区芸術文化支援制度」の助成をはじめとして、日本音楽学会「音楽関係学術イベント開催助成金」、公益財団法人ロームミュージックファンデーション「音楽の公演への助成」、東京藝術大学音楽学部同声会の後援を頂いたことは、大きな支えとなった。また、洋楽史研究に携わる研究者、三浦環・政太郎縁者の皆様が各地からご来場下さったことは、三浦環に取り組んできた者として望外の喜びであった。この場を借りて、本公演に関わって下さった全ての皆様に御礼申し上げます。ありがとうございました。



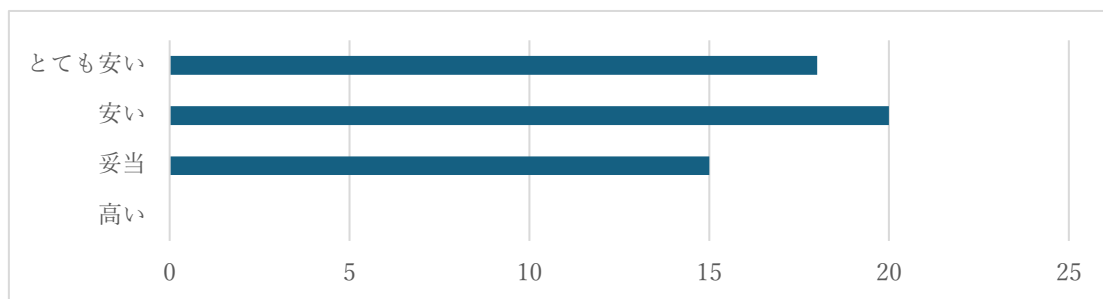
(撮影：深堀瑞穂)

【参考資料：アンケート集計より】

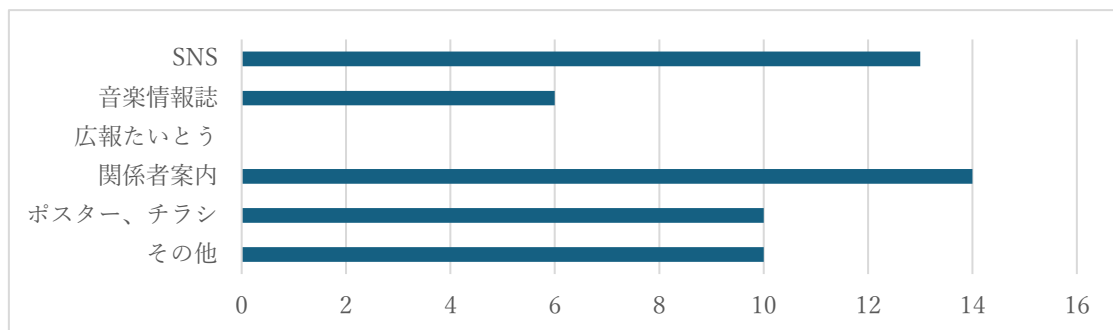
Q1. 本日のコンサートは満足？



Q2. チケット代金をどう感じるか？



Q3. どこで公演について知ったか？



Q4. 今後も行ってみたい企画は？（複数回答可）

